



2025（令和7）年4月30日発行  
（編集）愛光本部  
（TEL）043-484-6391  
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

【はるの風】

4月1日、令和7年度の辞令交付式が行われ、新任職員8名、異動職員4名、雇用変更の職員4名に辞令が交付されました。

新任職員たちは、4日間の新任職員研修を終え、配属先の現場での日々が始まりました。現場に、新しい風を吹き込んでいただきたいと思います。

□事業経過など（2025.3.1～）

1	土	ボランティア交流会
3	月	宮前 GH 地鎮祭
4	火	業務執行会議/地域食堂ネットワーク
5	水	地域食堂委員会
10	月	臨時業務執行会議/はちす苑業務改善 WT
11	火	第三者委員報告会/防災訓練/感染症対策・衛生委員会
12	水	子育て応援 WT/コ・ヒューマントレーニング
13	木	メンター委員会/広報委員会
14	金	職場改善委員会/70周年 WT
15	土	理事会
17	月	実績会議(佐)
18	火	研修委員会/後援会運営委員会/南図書館販売会
19	水	地域食堂ともいき
21	金	ボランティア委員会
24	月	労務研修/テクニカルスキル研修/入退所 WT
25	火	コンプライアンス委員会/実績会議(本)
26	水	実績会議(障)/実績会議(地)/財務 P
27	木	実績会議(高)
28	金	内部統制進捗報告会
29	土	評議員会
31	月	人事 WT/退職者辞令交付式

## ■ 月報から

### □ 伝達研修 (ルミエール)

千葉県では障害者虐待防止権利擁護研修を開催しており、毎年職員が受講してスタッフ会議の場で伝達研修を行っている。ルミエールでは身体拘束が必要な利用者がいて、身体拘束のモニタリングも行っているが、研修の場で職員に対して何度も身体拘束の3要件について話をしている。虐待の通報についても説明し、研修事例から自分だったらどうするかを考えてもらい発表してもらった。職員として常に権利擁護の意識を持ち、利用者を守れる施設でいられるようにしていきたい。

(ルミエール課長 原 宏之)

### □ めいわで看取り支援を考える (めいわ)

めいわもいよいよ看取り支援を考える時期に来たかと身構えたところだったが、高齢の利用者さんの最近の元気な様子から、少しその意識が薄らいってしまった感はある。しかし、利用者の病気が治ったわけではなく、高齢化が進んでいるめいわでは、これからも避けて通れない課題となっていくのだろう。

看護師に、中重度の知的障害のあるめいわ利用者に対して、延命処置の意向を確認することについて意見を伺うと、「全員に延命処置の意向を確認するのではなく、元気なうちに好きなこと、やりたいこと、会いたい人などを聞いておくのがいいのではないか。」と助言を受けた。死を考えることは、どのように生きるかということに繋がる。どこかで迎える死を意識しつつ、その分、今ある生をどれだけ豊かにできるかを考えることが大事だと改めて思った。利用者さんの希望を確認し、これからもできるだけ元気で楽しく過ごすことができるよう支援していきたい。

(めいわ課長 中田 憲一郎)

### □ i-koubow!の新たな展開 (根郷通所センター)

酒々井サービスエリアの責任者から次のようなメールが届いた。『高速道路と福祉を結ぶ「高福連携」を通じ、地域社会の活性化と社会課題の解決に取り組んでおり、貴団体との繋がりを強調したい』との内容であった。近年、障害者の就労に新たな可能性として、「高福連携」が広がりつつある。NEXCO 東日本が2017年に始め、2019年度には約20の事務所が取り組んでいる。

販売活動も「福祉を売りにせず商品の価値で売る」ことを掲げ努力した結果、商品の評価も向上し、売れ行きも順調に推移している。店舗の入れ替わりが激しい中、生き残ってきたのも実力があつてのことだろう。商品の販売場所がメインエリアに移動するなど販売店からの評価も上々である。

このアプローチを通して、福祉的な活動の枠に止めず、商業的な価値を追求することで社会貢献に繋げる狙いもあった。購入者より”良い商品を手ごろな価格で提供している”との声や”卒業式の記念品”として学生に贈られるなど”社会貢献としての手応え”も感じてきた。

今回の NEXCO 東日本の提案を期に、今までの取り組みが一定の成果を果たしたとの判断のもと”次の展開に進む”こととしたい。今後は法人の名前を前面に出した展開を考えていくこととする。

“法人の看板商品”として、そしてなりより”利用者と共に喜ばれる商品を世に送り出す”ことの誇りを持って商品を販売できるよう、更なる質の向上と商品開発を進めていきたい。

(根郷通所センター所長 菊池 暁生)

## □ 初めての看取り (リホープ)

障害高齢者支援と終末期ケア、大きな課題となっている。ちょうどこの時期、常勤職員の間接評価面接があった。面接時、各職員に「もしもの話だけど、利用者の方が、食事などが少ない状況で退院し、その後、老衰の診断を受けた場合、施設で最後までケアすることについてどう思いますか」と聞いてみた。「看取りは経験ないので、よく分からないのですが、夜間が怖い、不安です。でも、施設で最後まで暮らす方が、いろいろできることがあるし、ご本人にとって幸せだと思います。最後まで看たい」という意見がほとんどであった。管理職の会議で、もし利用者の方がそのような状態になったら、条件を整えて看取りを行う方向となった。ご家族にも、看取りも含めた、今後の方向性や今のお考え(お気持ち)について伺った。老衰などで治療の余地がないという状況であれば、慣れた施設で最後まで過ごしてほしいという考えであった。

1月下旬、食欲がなく体調が悪くなり、利用者の方が再度入院された。1週間後、前回の入院より回復が遅く、食事ほとんど食べていない状況と病院から報告があった。看取りに近い状態であるため、職員の気持ちを確認しながら、看取りケアや体制などについて、グループに分けて説明会を行った。「みんなが何をしたいのか、それを考えることが一番大切。看取りだからやってはいけないということはないので、後悔しないようにやりたいことはやってほしい」ということが大切であると伝えた。看護師へも同様の説明を行った。

2月中旬に退院。施設の正面玄関に入って自分の部屋が近づくと「にやっと」顔が笑ったことが印象深かった。「猫カフェにもう一度行く」を第一の目的に、食事や水分は、好きなものを中心に提供。かなり体力は低下していた。3月上旬「猫カフェ」に行くことができ、ご本人も楽しむことができた。

3月の早朝、ご逝去された。今にも起きそうな穏やかな表情。細やかなケアで褥瘡もなかった。職員が一つになって看取りケアを行えたことは大きな財産となった。

(リホープ副施設長 麻生 知明)

## □ 避難訓練 (山王の家)

5日、当日は小雨が降る季節外れの寒さの中、今年度最後の避難訓練を行った。今回は「震度7の地震があった後2階談話室から出火し避難」という流れで行い、職員、世話人は通常の内容に加え自動火災報知設備(以下「自火報」)を実際に使用する内容で行った。初期消火に失敗し避難誘導。並行して自火報を押し自動音声を活用する予定だったが、自動音声コール開始までに若干時間があり、思わず受話器を取ってしまったため直接消防署とやり取りすることになった。幸い必要な情報・項目も掲示されており、それに従い説明も行うことができた。

一分一秒を争う火災の現場。訓練とはいえ焦るのも当然。だからこそ、有事に備え訓練を繰り返すことの必要性を改めて感じた。今後も繰り返し訓練を行い、職員と世話人の連携を図ること、利用者の動きを確認していく。今回の訓練内容も会議で報告し、情報共有していく。

(山王の家管理者 岡本 綾子)

□ 城の辺地区社協 福祉委員会に参加して (ワークショップかぶらぎ)

15日(土)佐倉市中央公民館にて城の辺地区社会福祉協議会の福祉委員会が開催され、パトロール活動や買い物支援、訪問サービスやサロン活動など年間の活動報告が行われた。そこでワークショップかぶらぎが車両提供や会合へのカフェスペース貸しで関わっている買い物支援事業において、利用する地域住民の声を紹介された。

「利用する前は家の中に籠る暮らしで、足腰がどんどん弱っていった。買い物に連れ出してくれたら、カフェで色々な人と会えることが楽しみにになり、また元気に出歩けるようになった。感謝している。」とのことであった。

この話を聞いた利用者は「自分たちの仕事がかんな風に人の役に立つとわかり、誇らしいような気持ちが湧いてきた。」と感想を述べていた。

(ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹)

□ 食材業者の変更 (ジョーの家)

光熱費、食材費の高騰により、現在の食材業者では、入居者からの利用料金で食材料費を賄うことが困難になっている。入居者の食生活の質を維持しつつ、負担額を軽減するため、新たな食材業者の選定が必要となった。2社の食材業者に対して、お試し利用を実施し、入居者および世話人から、試食の感想を収集した。試食の感想、負担額などを総合的に評価し、現在の食材業者よりも負担額を減額できる業者を選定した。新しい食材業者に変更後も、入居者に引き続き食事を楽しんでもらえるよう、食事に関して要望や意見を大切にしていきたい。

(ジョーの家 高橋 健)

□ 一年を終えて (よもぎの園)

今年度も作業に追われる就労継続支援B型らしい一年であった。昨年度でコロナ不況は終わり、この一年はコロナ前の活況に溢れていた。リスク分散を考えての作業導入もようやく形になってきたように思うところもあるものの、いつそのリスクに直面してしまうかの不安も常に付きまとうところが就労事業所の悩みでもある。

稼働は新規利用者の獲得もあり90%台に乗れるかと思われたが、年度途中での退所者もあり結果的に昨年度から0.8ポイント増の87%の稼働率となった。月ごとでは90%台の時もあったので、次年度こそ目標到達(93%)を目指したい(次年度は2名、新しい仲間が加わる予定である)。

作業の売り上げについては昨年度から13%増の1080万円に到達することができた。これも利用者、職員一丸となって取り組んできた結果であるため素直に喜びたい。次年度も今年度の数値をベンチマークとして目標を掲げていきたい。

(佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一)

□ 春は出会いと別れの季節でしたね (かけはし)

令和6年1月に開所した「かけはし」。開所当初から相談支援専門員としてかけはしの運営を支えてくれていた職員が3月末をもって退職となった。一つ一つのケースに丁寧に対応し、相談者の困りごとの細かい部分にまで気付くことができる優しい人柄は利用者からの評判も良く、「寂しい」「これから誰を頼ればいいのか」「本当にお世話になった」と退職を知った利用者や関係者からは別れを惜しむ言葉や声をたくさんいただいた。最後にいただいた感謝の言葉や声は職員にとって最高のはなむけになったと思います。

4月には出会いの季節がやってくる。相談支援を必要としている方々やかけはしから旅立つ

こととなった職員にも、素敵な出会いがあることを願い、新しい発見、学びが貴重な第一歩や更なる成長へと繋がっていくことを期待したい。

(かけはし所長 戸室 輝大)

#### □ 個別避難計画書が始まる (アシスト)

生活支援部会の作業部会である「医ケア児者の災害対策検討部会」で取り組んできた個別避難計画書が、令和7年度から本格的に開始する。今年度、アシストでは医ケア児1件、身体障害者1件の個別避難計画書を作成した。佐倉市は地域(自治会等)に作成を依頼し、地域での作成が難しい対象者を相談支援事業所が支援する方式を取った。(医ケア児者は地域ではなく、相談支援専門員が主に作成する)避難を支援する方を具体的に記載すること、避難先として想定する場所を記載することが求められている。避難先の想定として、指定福祉避難所が候補となる。法人では先行してよもぎの園、そして続いて入所3施設、はちす苑が指定化している。法人の施設が避難先となった際は、ともに協力して取り組んでいきたい。

(佐倉圏域事業部長 近藤 美貴)

#### □ 特養行事「いちご狩り」 (はちす苑)

千葉市若葉区にある「ドラゴンファーム」へいちご狩りに行きました。

行きの車中では、「いちご狩りは初めて」と、楽しみにしている声も聞かれました。到着後は、霧雨が降っていましたが、移動距離も短いためほとんど濡れることなくビニールハウスに入りました。いちご狩り会場に入り、職員付き添いの下、皆様一斉にいちご狩りを開始しました。どのご利用者もとても幸せそうにいちごを召し上がっており、「本当においしい。いっぱい食べなきゃもったいない」と、20個以上召し上がったご利用者もいました。

いちご狩りの後は、受付でコーヒーと大きないちごに乗ったプリンを召し上がり、皆様大満足な様子でした。帰りの車中でも「とても楽しかったし、美味しかった」と喜びの声が聞かれました。

(はちす苑 苑長 安部 一義)

#### □ 出前講座開催(シルバー人材センター) (南部包括支援センター)

30日(日)、シルバー人材センターから依頼を受け「認知症の関わり方と認知症予防」をテーマに講座を行った。当日は根郷・弥富地区でサポーターとして働かれている43名の方が参加された。高齢化は全国的に急速に進行しているが、千葉県は特に75歳以上の後期高齢者の増加率が全国で1位であり、今後早いスピードで高齢化が進んでいくことが予想される。認知症は長生きをすれば誰でもなる可能性があるため、高齢化とともに認知症高齢者も増加していく。そのため、認知症の方を地域で見守っていく仕組みが必要であるとお伝えした。途中、クイズや心理テスト・脳トレを挟みながら説明を行った。

認知症予防については、絶対予防できるという方法はないが、①バランスのよい食事 ②運動 ③役割や生きがいをもつ ④早期発見の重要性について、包括の看護師よりお伝えした。今年度様々な場所で認知症について説明を行ったが、地域住民の方の認知症への関心は高いと感じた。今後さらに認知症高齢者が増えていくことが予想されるので、認知症があってもなくても地域で安心して生活ができるような体制づくりをしていきたい。

(南部地域包括支援センター管理者 森 由美子)

□ 教養教室発表会 (南部地域福祉センター)

3月12日(水)当センターにて教養教室に参加されている団体の、年に一度の発表会が開催された。

各教室は、民謡、大正琴、書道、生け花、詩吟である。書道及び生け花は、大広間の一部に作品展示の形をとった。

ほか、民謡や詩吟、大正琴など、普段街では聞けない音色で、来場したお客様を楽しませてくれた。この発表会も、舞台のあるA棟の大広間での教養教室発表会は最後となっている。

(南部地域福祉センター 青山 秀人)

□ 2024年度を終えて (佐倉市南部児童センター)

今年度は、昨年度以上に事業を拡大できた年だった。「おばけやしき」や1歳児親子向けの「ペンギンちゃんクラス」、「はっぴいランチ」が再開された。全年齢対象のクイズラリーやハロウィン、小学生向けのクリスマス会やスポーツ大会も盛況だった。乳幼児親子の利用は減少傾向にある。市内の他館でも0~1歳児が中心になっているという。就園の低年齢化が影響しているようだ。支援の内容も見直す時期にきている。一方、小学生の利用が急増した。昨年度の4,508名から9,563名と倍以上になった。指定管理以降でも過去最多である。背景には、低学年の子どもたちが友達と約束して集まっていることがある。保護者も家でゲームをするより友達と遊んでほしいという気持ちがあるのだろう。地域の子どもたちが自然と集まる場になってきた。これまでは乳幼児親子向けの企画が中心だったが、今後は小学生向けのイベントも広げていきたい。

(南部児童センターインストラクター 吉田 知加子)

□ 大好きな6年生 (学童保育所)

6年生お別れ会という行事名で起案をしたが、在籍児童より「お別れは寂しいから、送る会にしたい!」と、話があり行事名を変更した。今まで取りまとめをしてくれていた6年生がいなくても、5年生を中心に進んで役を担ったり、アイデアを出したり、今までの在籍児童とは格段に違う姿が見られた。当日は、それぞれの役割を果たすことができ、6年生もたくさんの笑顔が見られた。

(学童保育所主任 平野 美幸)